

極地から地球が見える

南極大陸の海岸には約40億年前の岩石が姿を見せ、かつて南半球の大陸が一つだった Gondwana 大陸の痕跡に出会える。地球の歴史を足下を感じる南極だが、見上げればオゾンホールが開き、温室効果ガスの二酸化炭素の濃度は上昇、地球環境の変化は現れている。45次越冬中は昭和基地から千キロ離れた内陸のドームふじ基地へ1カ月かけて旅した。-79.7度を記録したこの地で観測隊は、深さ3035メートル、72万年前の氷を掘り出すことに成功した。閉じこめられた太古の大気から、地球の気候変動を探っている。51次隊では地学調査隊が昭和基地を離れ、セールロンダーネ山地で野営、地質や地形の調査が行われた。隕石探査では635個を集め、太陽系誕生の謎に迫った。

南極より、温暖化の影響が著しく現れているのが北極だ。グリーンランドの標高800メートルの氷床の上で見たものは、溶け水が川となって流れ、巨大な穴へ滝のように吸い込まれていく光景だった。極地は、地球環境の太古から今、そして未来を私たちに語りかけている。

2010年**10**月4日(月) 16:30~18:00

慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎1階シンポジウムスペース

参加費：無料（学生の来場歓迎）

塾外の方はセンターへ事前申し込み必要（塾内の方は不要）



講師：中山 由美氏

◇朝日新聞東京本社科学医療グループ記者

1993年朝日新聞に入社。青森支局、つくば支局、外報部、社会部を経て、現職。外報部時代には、2001年9月11日の同時多発テロ実行犯の生涯を追って、ドイツや中東を取材。長期連載「テロリストの軌跡」（2002年度新聞協会賞受賞、単行本は草思社）の担当者のひとり。2003年11月～2005年3月、第45次南極観測越冬隊に同行。報道記者としては女性で初めて。昭和基地から雪上車で一カ月、1000キロ遠征し、マイナス60度のドームふじ基地で氷床掘削を取材した。2008年8月には北極・グリーンランドで、米国観測チームに同行して解けゆく氷床を取材した。2009年11月から2010年3月まで、51次隊で南極再訪、隕石探査に同行し、セールロンダーネ山地で40日間を過ごした。著書に「テロリストの軌跡」「こちら南極 ただいまマイナス60度」（草思社）、「南極ってどんなところ？」（朝日新聞社）。



REC for NS

research and education center for natural sciences